

「平和な生活」

詩篇

第128篇 1節～2節

テサロニケ人への第二の手紙

第3章 6節～16節

説教

本庄侑子伝道師

聖書は「平和」をくり返し語ります。「平安」とも訳されますが、元の言葉は同じです。「わたしは平安をあなたがたに残して行く…わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異なる。」(ヨハネによる福音書14章27節)主イエスが来られたのは、世が与えるのとは異なる平安を与え、平和な生活を来たらせるためでした。

テサロニケ人への第二の手紙は平和への祈りで始まり(1章2節)、平和への祈りで締めくくられます(3章16節)。他の手紙も、始まりはいつも「イエス・キリストの平安があるように。」という祈りです。どの教会においても平和への祈りは切実だったのでしょうか。この手紙が書かれた時は、一部の人々が主イエスの再臨はすでに来たと思われまわり、「怠惰な生活」(11節)をする人たちが現れて、平和を破壊していました。

彼らは「働かないで、ただいたずらに動きまわって」(11節)しました。英語で“busy body”。怠惰と言っても体自体は忙しく動きまわっていたのです。主イエスの再臨はすでに来た。まだだとしても明日かもしれない。そんな緊迫した日々の中、日常生活を放り出して、教会の活動だけに熱中する人々が現れていました。

この時、誰よりも伝道に専念すべきだった立場だったパウロは、あえてその権利を放棄して、日夜働きながら伝道して模範を示しました。(7節～9節)教会は、浮世離れた生活や熱狂的な活動をその始まりから拒んできたのです。この世を尊び、この世の生活を大切にしてきました。

礼拝前、教会学校や祈禱会でサムソンの物語をお読みしました。サムソンもまた、いたずらに動きまわっていました。サムソンは怪力でした。神がサムソンに力を与えて、世で成し遂げたいことがあったからです。しかしサムソンはその力を、自分の欲望を満たすためや、気に入らない人々への恨みを晴らすために使っていました。たどり着いたのは悲劇的な結末でした。サムソンの力によって痛い目にあった人たちが、サムソンの妻と家族を焼き殺して仕返しをしたのです。

パウロは祈りました。「どうか、平和の主ご自身が、いついかなる場合にも、あなたがたに平和を与えて下さるように。」(16節)主イエスのある祈りを思い出します。死から復活させられ、弟子たちの前に現れた時、開口一番におっしゃっ

た「安かれ」(ヨハネによる福音書20章26節)という祈りです。「あなたがたに平和があるように。」と同じ言葉です。弟子たちからすれば、会わせる顔などない場面です。彼らは主を見捨てて逃げてしまいました。主は十字架につけられ、殺されてしまいました。復活の主がもう一度弟子たちの前に現れるならば、よくも裏切ったなと責め立て、裁き、仕返しをなさって当然の場面です。しかし、主は「安かれ」と祈られた。

キリストの平和。それは、主イエスに責められ、仕返しをされて当然の場面で、完全に赦され、平安を祈られ、和解を申し出られること。主イエスによる関係の回復です。先日、求道中の方がおっしゃいました。『そんなことあってもいいんでしょうか。そんなことをしてもらうには、私はあまりにもふさわしくありません。』ギブアンドテイクで動く世の価値観では、どう考えても辻褄が合わない。しかしそれが、主イエスがしてくださったことなのです。

主イエスはさらに、弟子たちに聖霊を吹きかけて、世におつかわしになりました。争いや憎しみが渦巻くこの世に、辻褄の合わないキリストの赦しをもたらし、平和を与えるため、神との関係、互いの関係を回復させるためです。私たちが洗礼を受けた後もなお、世で働くのはこのためです。主の日ごとに礼拝へと呼び集められ、聖霊を吹き入れられ、キリストの平和をもたらすために世につかわされるのです。

平和な生活。それは、世での労働を軽んじて信仰熱心になる生活ではありません。いたずらに動きまわって悲劇的な結末を迎える生活でもありません。ふさわしくない者が、罪赦された驚きと感謝をたずさえて、世につかわされる生活です。聖霊を吹き入れられ、人を愛し、赦すキリストと共に歩む生活です。

平和への祈りが切実になるこの聖日。今週、ここから遣わされるのは、あなただけに用意された労働の場です。キリストの平和をもたらすため、神との関係、互いの関係を回復させるために神が与えてくださった特別な場所です。「どうか、平和の主ご自身が、いついかなる場合にも、あなたがたに平和を与えて下さるように。主があなたがた一同と共におられるように。」

(記 本庄侑子)